

# いわき駅周辺における落書きの空間的分布 ―東日本大震災前後の比較―

吉村 忠晴・川崎 俊郎

## Spatial Distribution of Graffiti around Iwaki Station before and after the Great East Japan Earthquake

Tadaharu YOSHIMURA and Toshio KAWASAKI

**Abstract:** The broken windows theory suggests that signs of disorder like broken windows and unlawful graffiti induce other disorder and petty crime. The purpose of this paper is to examine spatial distribution of graffiti around Iwaki Station. We conducted the field study to collect data of graffiti (places of drawn graffiti, objects damaged by graffiti, types of graffiti) around Iwaki Station. Then, we investigated the relationship between spatial distribution of graffiti and spatial characteristics, such as land use, building use and road width. We also compared spatial distribution of graffiti before and after the Great East Japan Earthquake.

**Keywords:** 落書き (graffiti), 東日本大震災 (the Great East Japan Earthquake), 割れ窓理論 (broken windows theory)

### 1. はじめに

本研究では、いわき駅周辺を対象に秩序違反行為の一つである落書きを取り上げ、それが放置されている地点を調査し、落書きの空間的分布を示す。また、その空間的分布の特徴から落書きの行為者の心理を読み取り、落書きをする場所や対象物をどのように選択しているのかについて検討する。さらに、東日本大震災前後の落書きの分布を比較し、震災前後の差異を震災の影響との関連から考察する。

本研究では、落書きという行為を「割れ窓理論 (broken windows theory)」の立場から捉えること

にする。この理論は、割られた窓のように軽微な犯罪や違法行為を放置しておく、その場所は管理されていない場所と認識され、そのような行為が増大し、地域が荒廃していき、重大な犯罪の発生につながっていくという考え方である。

### 2. 本研究の経緯

筆者らは、2年生を対象にした「ミニ研究」という科目において、「GIS (地理情報システム) を利用した身近な地域の地図情報化」という課題テーマを設定し、配属された学生 (教員1人につき5名程度) に調査・研究の実践を指導している。

平成22年度の「ミニ研究」において、学生からいわき市内における犯罪発生場所を地図化したいとの希望が挙がった。しかしながら、必要なデータの入

---

吉村 〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾 30

福島工業高等専門学校一般教科 (社会科)

Tel: 0246-46-0771

E-mail: yoshimura@fukushima-nct.ac.jp

手可能性、限られた期間での実現可能性、調査時における安全性といった面から検討した結果、事件化された犯罪ではなく、秩序違反行為の一つである落書きを調査対象にすることとした。

落書きを調査対象に選んだのは、落書きはその痕跡がそのまま残っていることが多く、秩序違反行為のなかでも犯行の現場を確認しやすいという理由からである。また、狭い範囲を調査対象にしても分析に耐えうるだけの数を確認できるという点も考慮した。ただし、問題点として、落書きを行った個人もしくは集団を特定できない点、落書きが行われた日時を把握できない点がある。

調査対象地域は、いわき市内で落書きが最も多く発生しているいわき駅南側の中心市街地とした。具体的には、南北がJR常磐線から国道6号線までの約500m、東西がいわき駅を挟んだ約700mの範囲とした(図1)。なお、背景地図としてESRIジャパン(2009)「ArcGIS データコレクション プレミアムシリーズ 詳細地図(東北地方版)」を使用した。



図1 調査対象地域

### 3. 調査対象地域における落書きの特徴

確認された落書きのほとんどは、タグと呼ばれるタイプであり、単色による簡単なデザインでかつ小規模のものであった。このことから、この地域の落書きは、通りすがりに短時間で実行されたものが多いといえる。落書きに使用されていた色は、黒色と青色が多く、他に銀色、白色、緑色も見られた。

落書きの対象物を見ると、飲食店や商店の建物の壁、それらの脇に設置されている電気メーターや配

電盤などの電気設備が多かった。また、駐車場の看板や設備、駐車場を囲む塀にも多く見られた。他に飲食店や商店に設置されているエアコンの室外機、排気用ダクト、ゴミ収集用のゴミ箱にも落書きが確認された。なお、これらの対象物は建物の側面、建物間の隙間にある場合が多かった。一方で、住居専用の住宅を対象とした落書きは確認されなかった。

公共物では、陸橋の橋脚や電柱、歩道上の電気設備、バス停などに落書きが見られた。しかし、いわき駅前再開発によってできた新しい建造物や施設への落書きは見られなかった。

以上のことから、落書きを行う者であっても、個人の住宅や新しくつくられたものに落書きをすることには、多少なりとも罪悪感が生じ、落書きすることを避けているのではないかと考えられる。

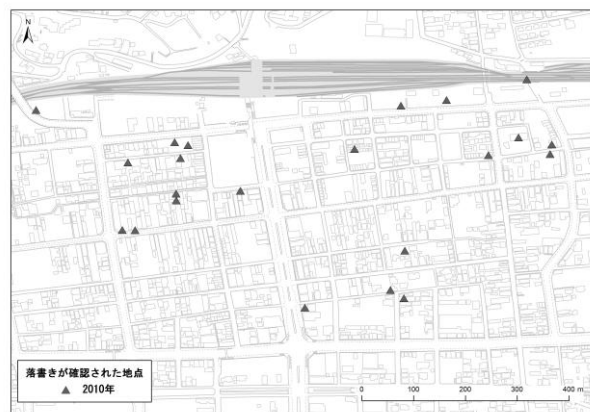


図2 落書きの空間的分布  
(上:2010年,下:2011年)

### 4. 2011年における落書きの空間的分布

2011年8月において調査対象地域内で落書きが確

認されたのは、40 地点であった。なお、同じ地点で複数の落書きが確認された場合もあった。落書きされている地点は、調査対象地域を南北で比較すると北半分に、東西で比較すると東半分に多く分布しているのがわかる。そこで、調査対象地域を駅前大通りと本町通りを境に分割した四つのブロックごとに落書きの空間的分布を見ていくことにする。

まず、調査対象地域の北西にあたるブロックについて見ると、銀座通りとレンガ通りに挟まれた歓楽街のなかに落書きが多く見られる。このあたりは二つの通りを結ぶ3本の細い路地に沿って飲食店やスナックなどが入居する雑居ビルが立ち並んでいるところであり、小規模な店舗も多く、店舗密度の高いところである。また、このあたりは、店舗の廃業や入れ替わりの激しいところでもある。落書きされていた対象物は、廃墟になっている建物の壁や有料駐車場の看板などであった。落書きの多くは、その痕跡から判断して落書きをされてから時間が経過しているものであった。このあたりはいわゆる歓楽街であるため夜間の人通りは多いものの、年齢の高い層を対象としている店舗が中心ということもあり、落書きをすると想定される年齢層の活動範囲ではない。他にこのブロックの南端を通る本町通り沿いにも落書きが確認されているが、同様に古い落書きが多い。

また、このブロックの北西端に位置しているJR常磐線と磐越東線の線路を跨ぐ国道399号線の陸橋の橋脚には、調査対象地域内で落書きが最も集中していた場所がある。この場所は、陸橋の下にあるため周囲から死角になっており、落書きの現場を他者に見られる可能性が低い。ただし、すでにほとんどの橋脚に落書きがされているためか、新しい落書きはなく、この場所の落書きも描かれてから時間が経過している。

次に、落書きが最も多く分布している北東ブロックについて見ていくことにする。いわき駅周辺には、居酒屋やスナックなどが立ち並ぶ歓楽街が発達しているが、若者向けの娯楽施設が少ない。とくに夜間の時間帯に営業している若者向けの施設が少ない。そのなかで、夜間の時間帯に営業している数少ない若者向けの娯楽施設として、このブロックの東に立

地しているライブハウスがある。このライブハウスの壁や周辺の看板などには多くの落書きが見られる。また、いわき駅方面からライブハウスへの移動経路にあたる地点にも多くの落書きが見られる。さらに、ライブハウスの近くにはいわき駅周辺で最大のショッピングセンターがある。夜9時までの営業ではあるが、ショッピングセンター内のフードコートは若者たちの集まる場となっている。いわき駅からこのショッピングセンターへの移動経路はライブハウスへの移動経路と同じである。それゆえ、これらの場所の周辺及び移動経路上は、落書きの行為者にとって、落書きを他の人間、とくに行為者と同じような属性の人間に誇示したいという欲求を満たす場所であるといえる。なお、落書きが見られた場所は、幅員の狭い道路沿いであつたり、脇に入った路地であつたり、周囲からの見通しの悪い場所が多い。

本町通りの南側では、オフィスや商店、飲食店の並んでいる駅前大通りや本町通り沿いを除けば、商店や飲食店の集積度は低い。一方で住宅の比率が高く、多くの住民が居住している。

南西ブロックでは、すでに消去されたものを除くと落書きは確認されなかった。このブロックは、住居専用もしくは店舗兼用の低層の戸建住宅が多く、道幅も広いため見通しが比較的良好。また、若者の利用する店舗は少なく、彼らの活動範囲ではない。このブロックの住民には高齢者が多いため、昼夜間とも在宅している確率が高い。そのため、犯罪を企図している者からすると、視線の強さを感じられる。また、住民の居住年数が長く、近隣の住民相互に顔見知りであることも多く、地域コミュニティが形成されている。それゆえ、住民以外の人間は目立ってしまうこともある。

南東ブロックには落書きが確認された地点がある。このブロックは、住宅が多く、若者の利用する店舗が少なく、彼らの活動範囲ではないという点においては南西ブロックと共通している。しかし、このブロックには戸建住宅に加えてマンション・アパートといった集合住宅も見られるという点で南西ブロックとは異なる。また、南西ブロックに比べて、このブロックの道幅は狭く、細い路地も多いため見通し

が悪い。さらに、このブロックの道路が北東ブロックへの移動経路となることもあり、その移動経路上には落書きされている。

## 5. 東日本大震災後の変化

筆者らは、いわき駅周辺において東日本大震災後に新たな落書きが増加していることを確認した。このような落書きの増加は、震災の影響による犯罪機会の上昇が関係しているのではないかと考え、平成23年度の「ミニ研究」においても同じ調査対象地域で落書きの現地調査を実施した。



図3 震災後に行われた落書きの例

2010年9月において調査対象地域内で落書きが確認された場所は、22地点であった。このうち2地点は2011年8月の現地調査までに落書きの痕跡がなくなっていたので、2010年から2011年までの約1年間で20地点増加したことになる。このなかには、2010年9月の調査から東日本大震災が発生するまでの間に落書きされた地点も含まれてはいるが、震災後の予備調査（2011年5月）で確認した結果（落書きの痕跡の新しさ、落書きの内容、落書きの種類）

から、その多くは震災後に落書きされたものと判断できた（図3）。また、それ以前の落書きとは異なり、人目につきやすい場所への落書き、それまで落書きがされていなかった対象物への落書き、同じ行為者による複数の落書き、面積の大きい落書きなど、より悪質な落書きが見られるようになった。

東日本大震災直後は地震による被害や福島第一原子力発電所の事故の影響もあり、調査対象地域内の住民の多くも他の場所へ避難したり、外出を控えたりするようになった。また、震災による建物被害やライフラインの停止などにより、この地域における商業・サービス、業務などの都市機能は停止してしまった。さらに、鉄道やバスといった公共交通機関の運休やガソリン不足の問題、放射線の影響を危惧したことによる外出の減少も重なり、この地域への来街者も大きく減少した。この結果、この地域では住民がいなくなっただけではなく、通勤・通学、業務、買物、娯楽といった目的で訪れる人もいなくなり、人通りもなくなってしまった。それゆえこの地域では他人から見られているという環境はなくなり、昼間、夜間に関わらず監視性が大きく低下することになった。このことが、この地域の犯罪機会を上昇させ、震災後に落書きが増加したという状況をもたらしたのではないかと考える。

また、震災後に落書きが最も増加したのは、2010年においても落書きが多く確認された北東ブロックであった。なかにはすでに落書きの痕跡があるところに新たな落書きが行われていた。このことは、落書きのような秩序違反行為が行われている場所やそれらが放置されている場所は、周囲から監視されていない場所であり、当事者によって管理されていない場所であると犯行を企図している者から認識され、より悪質な犯行の呼び水になるという「割れ窓理論」の主張にあてはまる結果といえる。

## 参考文献

- G. L. ケリング・C. M. コールズ、小宮信夫監訳（2004）『割れ窓理論による犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか—』、文化書房博文社、334p.